

8 愛玩鶏におけるロイコチトゾーン病の発生事例

○石戸里幸・本多秀次（富山県東部家畜保健衛生所）

【発生概要】

平成 26 年 7 月 28 日、管内の愛玩鶏飼養者から、納屋で飼養するウコッケイ 4 羽が死亡したため検査の依頼があり、病性鑑定を実施した。また、翌 29 日にも 1 羽死亡したため、同じく病性鑑定を実施した。

【診断と対策】

肉眼所見では、5 羽中 4 羽で脾臓の腫大が認められた他、主要臓器の腫大、退色、血様の腸内容物などが認められた。また、3 羽の死後血を用いた血液塗沫検査では赤血球内にメロゾイトが確認された。病理組織学的検査では、脾臓での出血及び壊死、主要臓器の血管内皮細胞等にシゾントの形成が認められたことから、ロイコチトゾーン病と診断した。

納屋周辺は水田が広がっており、換気のため窓が開放されていた。窓には網戸が設置されていたがサッシには大量のヌカカの死骸が蓄積し、屋内には生きたヌカカも多数確認された。同群の生鶏 3 羽の血液検査を実施したところ、全羽の赤血球内にメロゾイトが確認されるとともに、ヘマトクリット値は低値を示し顕著な貧血を呈していたため、サルファ剤の飼料添加を実施するとともに、蚊取り線香の設置やフルメトリン製剤の塗布によるヌカカ対策を実施した。これらの対策開始後、死亡する個体は無く、終息した。

【考察】

この飼養者は平成 26 年 2 月頃よりウコッケイの飼養を開始し、飼養鶏のほとんどが育成期の個体であったため、多量のベクターとの接触により容易に感染したものと考えられた。

今回の発生はサルファ剤の投与により終息に向かったが、今後の対策として、ベクターであるヌカカ対策が重要であると考えられたため、ヌカカ発生期間の蚊取り線香の使用および定期的なフルメトリン製剤の塗布を指導した。フルメトリン製剤はスポイトを用いることで 1 羽ずつ確実に塗布することができ、少羽数飼養者には有効な方法であると思われた。本年夏期には、本病により死亡する個体はおらず、これらの対策がある程度効果的であったことが示唆された。

今回の発生は、県内では 20 年ぶりの発生であったが、本年 8 月には県内の採卵鶏農場においても本病の発生があったことから、今後、夏期には、養鶏農家に対する本病についての注意喚起や、農場内におけるロイコチトゾーン原虫の感染状況の把握に努める必要があると考えられた。